

八朔祭り屋台飾幕

八朔祭りでは、かつては氏子の各町の若衆たちが競って豪華な屋台幕を飾った山車を繰り出しました。その山車の舞台で、芸者衆や若者が囃子に合わせて、さまざまな出し物を演じ、豊年を神に祈念しました。

近年、山車も交通事情等で姿を消し、当時の面影は飾幕でしか偲ぶことはできません。

屋台飾幕には、後幕・中幕・水引幕があります。

祖先から引きついで来たこの飾幕も痛みがひどく、昭和48年に都留市では保存会を発足させて、この貴重な文化財を補修、復元することになりました。地元の応援を得て、染織研究家、山辺知行氏の指導のもと順次修復が行われ、一応四枚の後幕が完成しました。

後幕は、屋台の後の部分の三分の一を包んで囃方を人目からおおう役目もしていました。山車の後の部分をコの字型に張りまわしてあります。絵柄を外に向けて華やかさを示し、内部には囃方を収容します。

現存している四枚の後幕について述べてみます。

よみがえった「桜に駒」

昭和58年の真夏の日でした。都留市社会教育会館の一室で、カーキ色の半ズボン姿の山辺知行氏は正座され、白い布の桜の花びらを幕に閉じつける針をたんねんに運ばれていました。緋ラシャの幕地に、たなびく春霞、咲きはこる万朶の桜の古木、前脚をあげていなく黒駒、舞い散る花吹雪。そこには仲町所有の「桜に駒」が復元され、完成間近の姿をあらわしていたのです。

聞けば桜の花びらだけでも600枚以上もあると云うのです。この作業の光景を目の当たりにして、わたくしは衿を正す思いでした。

復元された美しい飾幕を眼前にしてこの幕のたどった歴史が信じられない思いでした。

昭和10年9月の荒天に、市内、仲町大神宮公園の崖が崩れ、保管の倉庫が倒壊したのです。その時、この幕は土砂の中に埋没という憂き目に遇ったのです。

絵柄としては、金糸で縫取った桜花の形象のみが幕地にのこった無残な姿に変わり果てていたのです。

この受難にもかかわらず、絵師「鳥文斎藤原栄之」の落款は鮮やかに遺こされていたのです。宝暦6年に生まれ、寛政期の浮世絵美人画界にあって、人気最高の歌麿の名声にも負けない人気を博したと伝えられ、家禄



五百石の旗本でもありました。その藤原栄之なのです。この「桜に駒」にこめられた栄之の情熱は受難の中に失せず、燦然と輝いていた落款を残しました。この絵師の思いが、今、昭和の代に見事に復元され、よみがえったのです。

黒駒をはじめとする絵柄の形象が脱落した後の幕地の上には、退色のがれた部分がありました。そのシルエットを薄紙で写し取りたどっていく作業は困難を極めました。又、ただ単に押絵風に図柄をこれに合わせ布に綴じつければよいと云うものではありません。例えば黒駒をいかに生き馬の如くに表現していくのかと云うことです。

飾幕復元報告会で、山辺氏よりその苦心談が披露されました。

手がけてみて、江戸時代の絵師と職人衆がいかに秀でてたたくみな技と高い美意識をそなえていたかに驚きの連続であったとのこと。

春風に駒がいなくなると、引き綱に結わえつけた桜の木が揺れ動き、満開の桜の花は、花吹雪となる——その一瞬の美を、かくもみごとに栄之は、この幕に捉え得たのです。

文化文政に華開いた絵師のこの様なみごとな着想を葬ることなく、こうして昭和の代に「桜に駒」を復元出来得たことは熱いよろこびです。

幕の図柄に人物は描かれておらずとも、咲き誇る花に春を謳歌し、散る花に行く春を惜しむ——めぐる季節に人間の内なるものを最大に描き得ている格調高い飾幕です。



「鹿島踊」

国道139号線に面した新町御会所の中央に掛けられた真新しい「生出大神」の御神軸は、生出神社（都留市四日市場）の源生美貞宮司（号、白峰）の墨跡です。その前には、御神酒の瓶子と山海の御神撰が供えてあります。

御神軸の背後には、今年も新町の屋台後幕が張りめぐらされていました。

表座敷が御会所になっている総樺造り瓦ぶきの仁科家は、かつての甲斐絹問屋の風格を今に遺す、貴重な民家です。この飾幕は、これまで町内の人たちの努力もあって、最も保存がよく、毎年、御会所を華やかに彩り、地元の誇りです。

飾幕の絵柄は「鹿島踊」です。鹿島明神の御託宣を触れあるく、つまり「事触れ」の3人の古老の絵姿です。鹿島神社の神域で烏帽子に白丁、指貫姿で、天に向けて太鼓を打ち鳴らし、陽気な烏の絵柄の扇子をかざし、月うさぎの万燈を揚げて、踊りうかれる、まことに愉快で賑々しい情景です。

幕の布地は緋赤色のラジャ、幕の上部に、金箔の雲を重ね、中ほどから下部にビロードに金糸縫取りの老松や玉垣と、寿ぐ正月の雰囲気が満ちあふれています。3人の古老の装束は倫子の白丁、袖のくくりは平たく厚く

組んだ木綿の真田紐、活動的な指貫は縫取りをほどとした浅葱色や藤紫色の朱子で、足にわらじを履いています。

絵師の思いを裂に託してちりばめたさまざまな高級染織は、裂のコレクションをみる様です。

3人の長寿の古老たちがかぶる烏帽子と、かざす扇の絵柄の烏は共に黒ビロードのアンサンブルです。神の使いとして年中の吉凶を知る烏は、別名、かしまし鳥と呼ばれていました。その年の吉凶について諸国をにぎやかに触れあるく鹿島立ち姿の神官達と、かしましいと云う言葉を掛け合せています。言葉と裂がとりなす洒落です。

このような素材の使いどころ、見立てに、江戸人の洒落気のたくみさがあり、今更、舌をまきます。

老松の幹にまわりつく松茸は、江戸時代の黄表紙に「陽の余れる松茸となづけ……」とあるように、松茸を日の光と見立てたものでしょう。

この「鹿島踊」の作者は、北斎と伝えられて来ています。絵師葛飾北斎は文化年間に「絵手本」を発表しています。当時の職人たちが北斎の挿絵を下絵として利用していました。北斎はいわばこの幕の製作にあたってのディレクター的存在であったのでしょうか。大地を踏むわらじの足の指先にまでこめられた「事触れ」の古老たちの躍動的な整った姿態をながめていますと、高齢になってますます精力的に生きて仕事に打ちこんだ絵師、葛飾北斎、そのものではないかと思われてきます。「お目出たづくし」のこの飾幕には、江戸庶民の民俗がしっかりと息づいています。使用されている材料からも、染織の数少ない資料として、又服飾史の上でも貴重な存在であります。

修復を終えた今年（昭和62年）飾幕の古老たちはちりめん顔に厚化粧で登場して、少々気はずかしそうに見えます。生地がいたみ、補強のために止むを得ずゴフンを塗ったことを修復完成報告会で聞きました。前年までの長い歳月なじんできた古老のみやびた表情が今はなつかしく思えてなりません。

「竹林猛虎の図」

昭和60年11月、樺並木が葉を舞い降らす東京原宿の表参道を、わたくしは太田美術館へと急ぎました。開館5周年を記念して、葛飾北斎の特別展が開催され、それに都留市文化財の「竹林猛虎の図」（下町所有）が特別出品として展示されていたのです。

肉筆画を中心に北斎の多彩な作品が並んでいました。なかでも館内の2階の一壁面をいっぱい占めて、緋ラジャの地に、竹林を背景にして雌雄2体の虎は、太番手の金糸、黒糸のだんだらで縫取られ、強烈な印象で浮き



たっていました。

ギヤマン（ガラス玉）の両眼を爛々と光らせ、メッキされた直鑄の鋭い牙と鉤状の爪をもった四肢をふんばっています。かまえた虎の体軀の筋肉の盛りあがり、力強く表現した刺繍のたくみな糸使いの技に感心して見入っていました。強烈な原色の色彩同志なのに不思議と深い調和を保っているのです。

スケールの大きな絵柄は訪れた観覧者の目を強くうばっていました。

10センチほどの黒ビロードでふちどった緋ラシャの幕は他の飾幕と同様に額ぶち仕立てになっています。「竹林猛虎の図」の片隅に「東陽画狂人北斎筆」と落款が縫取られているのです。江戸時代の文献「浮世絵類考」（朝岡興禎編著）に「専ら、画狂人葛飾北斎と画名し雷名す」とあります。

この画名を用いる頃、北斎の画風をみますと、これまでの叙情的な感覚のものは消え、和漢の古典や故事を題材として、仕事に取りこんでいます。

堂々とした落款を用いたことから、北斎にとって、この「竹林猛虎の図」の飾幕は、相当の自信作だったにちがいません。

虎は吹いてくる風に対してさえも毛を逆立て、猛然たる気配を示すといえますから、この「竹林猛虎の図」は、勇者が事にあたって奮起するさまを物語っているのでしょう。

幕の中の三本の竹のひと節ひと節は、確かな縫取りで、みどりの一枚ずつの竹の葉は、その上部のみを生地に縫いつけ葉の大部分は浮きあがっています。ですから、山車に張りめぐらされて、引かれると竹の葉は揺れ動き、観るものに竹林を吹きぬける風を感じさせる工夫がありました。

八朔祭の山車の後幕は、文化年間の作と聞いていましたので、わたくしは、北斎の年譜をたどってみました。文化3年（1806）が丙寅とありました。ですから、この飾幕は、文化3年の寅歳に縁起をかついで八朔祭に間に合わせたのかも知れません。

ともあれ、八朔祭の屋台幕に虎が出現するとは、なかなか凝った趣向です。祭のどよめきの中に、王者の風格で他町を圧したものだだったのでしょ。ハイカラでエキゾチックな絵柄は今も実に新鮮です。

毛織物の緋ラシャは猩々緋と云って、当時ビロードと共に相当珍重されたものです。その幕の地に金糸、銀糸の刺繍をふんだんに使用していることから江戸の大呉服店の繁昌ぶりや、往時の郡内、谷村衆の財力の証と祭によせる心意気をつしりと感じます。

第二次大戦が終って、平和がもどったある八朔祭りの日、久々に下町では、屋台の山車が組み立てられました。うだる様な猛暑の祭りで、山車に張りめぐらされていたこの飾幕は、わたくしの目を射ったのです。下町の菓子の老舗「豆屋」の今は亡き菅谷富二郎さんが、小気味よくお囃子の太鼓をたたいていました。飾幕前のわたくしの耳をその音がふとくすめてきました。

八朔祭の飾幕は、幾多の歴史をくぐりぬけて長く吾が街に伝えられてきたのです。かけがえのない文化財として脚光をあびせられる展示場がいつの日かほしいと願いながら美術館を後にしました。

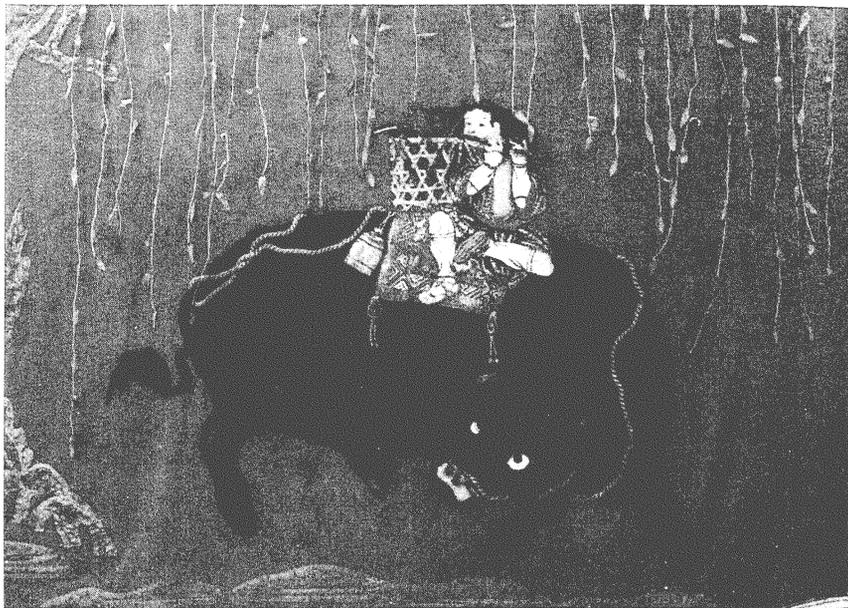
「牧童牛背に笛を吹く」

かつて土の道をきしませながら若衆が引いた屋台山車の車輪は「ふろふき大根の様な感じに分厚かったが……」と、以前、近所の古老が語っていました。

昭和62年の祭りの日、谷村町駅前にある早馬町屋台会館に復元されたその山車を見物しました。車輪の厚みは、わたくしの人差し指の長さほどでした。明治36年電気が普及しはじめ、街頭に電柱が立てられて道巾がせばめられ、木製の車輪は薄くそがれたのです。

会館の壁面を飾るのは、近年修復された早馬町所有の「牧童牛背に笛を吹く」の後幕です。

赤々と燃える夕映えを見立てた緋ラシャの幕の中央に、今しがた草刈りを終えた牧童がゆうゆうとした黒牛の背に乗って、横笛を吹きながら家路



に向かう、そのひとときの静かな情景をとらえた絵柄です。

中国宋代につくられた禅仏教の「十牛図」がありますが、この図柄は、その第六番目の絵姿から取りあげたと思われます。

白の絹糸の刺繍で水辺の川波を描いています。その水辺の柳の葉が風にゆらゆらとゆれ動いています。幕の上部からしだれる枝は、針金に金糸を巻きつけたものです。みどりの布で一枚一枚細工した葉は、その枝に交互に取りつけられ幕の布地に綴じつけてはありません。

この飾幕は、浮世絵師、葛飾北斎の下絵と伝えられています。

それを裏付ける手ががりの一つとして、「画本手引」（文政二年刊）で北斎は、いろは四十八文字で絵を分類しました。例えば、「か」の項の「風」では揺れる柳の枝を描いて表現しています。この様な機智に富んだ着想の面白さは、この飾幕のゆれ動く柳の枝にも十分生かされていると思います。

黒牛は本ものの角をかざし、爪には薄ガネと云った凝りようで童子の吹く横笛はもちろん本物の竹を使用しています。

童子は手甲とすねあての労働着ですが、袖口や腰ひもに鮮やかな緋ちりめんを用い、初々しい若ものらしさを表現しています。童子のなびく髪型や、真田紐を組んだ目籠に盛った刈草の一茎一茎にもそよぐ風の気があります。



風、水、空、雲、そして人間と動物と植物と宇宙に存在する森羅万象を、この飾幕は示しているのです。

この幕は、当時江戸随一の総合衣料店越後屋（三越の前身）で調製されました。

山車の軒には祭ちょうちんがめぐらされています。

中幕は後幕の開口部をふさぎ舞台の背景となります。この中幕は白縮緬に墨一色の濃淡で十五頭の裸馬が、のびのびとはね遊びたわむれている肉筆画です。

柳文朝筆、南柳斎の落款があります。

早馬町の名にふさわしい馬の図のこの中幕にそっと手を触れてみますと、まるで羽二重もちの様に柔らかで、本来の縮緬とはこういうものなのだと感じます。

早馬町には、後幕、中幕の他に、山車の舞台の裾をおおう「むかで」の絵柄の水引幕も遺っています。ピロードの毛足もすっかり取れて裏打ちの麻がとび出て見るも無残な「むかで」の姿になり果てていますが、「老兵は死なず」の心意気を示しているようです。

わたくしは、二百年近くもの歴史を物語っているこの水引幕に脱帽しました。

祭りの日暮れ時、屋台会館に町内祭当番の宮沢さんが、緋色の祭半纏に鱗紋の腰ひも、オカっぱ髪の豆しばりのハチ巻きが愛らしい幼ない孫さんを連れて控えていました。こんな祖父と幼な子の姿に、貴重な文化遺産の屋台飾幕が長く引き継がれていく一つの証をみた思いでした。

元木由美